

令和 6年 11月

日本科学未来館イベント「こどもからみる不思議世界探求」  
にご参加いただいた皆様へ

2024年9月21-22日に上記イベントにご参加いただき、誠にありがとうございました。今回のイベントでは3月に行ったものと同様の心理学実験を体験していただき、合わせて約130名のお子さんとその保護者の方に参加協力をいただきました。こどもの発達に関する貴重なデータを得ることができましたこと、心より感謝いたします。

ここでは石川の担当した「他者が見ているものは気になる？」というテーマの心理学実験について、基礎的なデータ解析が終わりましたので、参加された皆様全体の傾向について報告します。

研究実施者：石川光彦（一橋大学）

E-mail: mitsu.ishikawa@r.hit-u.ac.jp

## 研究概要

ある日あなたが街中を歩いているとき、空を見上げて指をさしている人がいる場面を想像してください。このような場面で、あなたは「なにを見ているのかな」と思い、その人物の視線の先をつい見てしまうのではないのでしょうか？他者の視線の先が気になってしまう傾向は大人だけではなく、乳児期からされています。

例えば、他者の視線が物体に向いていることによって、物体についての認知処理が促進されることが赤ちゃんを対象とした脳波研究から示されています (Reid et al., 2004)。また、私が過去に行った乳幼児研究では、他者が視線を向けていたおもちゃと視線を向けなかったおもちゃを並べて、実際に赤ちゃんがどっちのおもちゃを手を取るかを検討したところ、他者が視線を向けていたおもちゃが統計的に多く選ばれました (Ishikawa et al., 2019)。この研究から、他者の視線が向いていることで物体に対する選好が増加することが示唆されました。では、他者の視線が気になってしまう傾向は、子どもの学習にも影響するのでしょうか？今回の研究では、意識的に記憶しようとしていない場合においても、他者の視線方向によって認知処理が促進されるのかについて検討しました。

今回お子さんには、2つの課題を行ってもらいました (図1)。前半の課題では、画面に呈示される人物や矢印の方向は無視して、カラフルな図形が左右どちらに呈示されたかをキー押しですばやく反応してもらう課題でした。後半の課題では、カラフルな図形のみ呈示され、前半の課題に登場した図形かどうかを判断する記憶課題を行いました。前半の課題では、カラフルな図形について記憶するには教示されていなかったため、無意識にどの程度図形について記憶されていたかを検討する調査となっていました。他者の見ているものが気になってしまう傾向が本研究でもみられるならば、課題前半で視線が向いていなかった

条件や矢印が呈示された条件と比べて視線が向いていた図形についての記憶成績は高い、という仮説が立てられました。

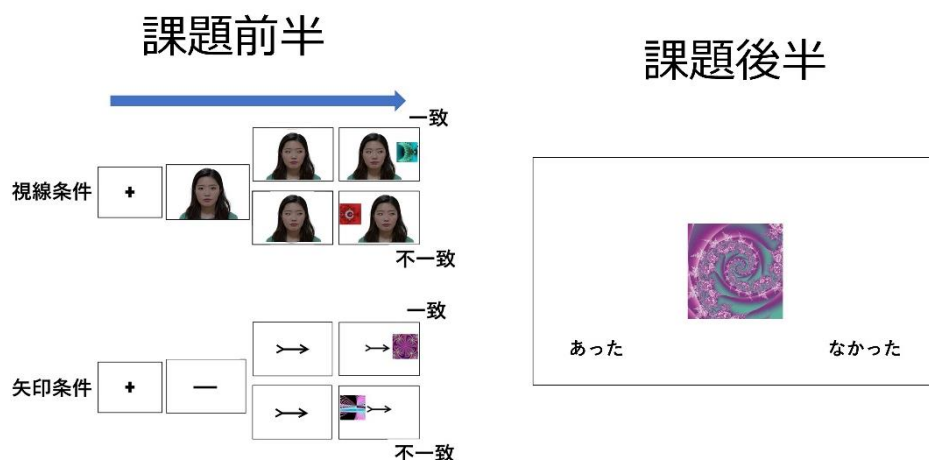


図 1. 実験に用いられた課題例。課題前半では図形が呈示された位置を反応してもらい、課題後半では、前半に登場した図形であるかを反応してもらった。

## 結果

記憶課題の正答率の平均値について条件ごとに比較したところ、予測通り、前半の課題で視線がカラフルな図形に対して向いていた際には (61.65%)、他の条件よりも正答率が高くなるのが統計的に有意に示されました (図 2)。この結果から、子どもにおいても他者が見ているものが気になってしまい、意識的でなかったとしても他者の視線が向いていた図形に対して認知処理が促進されるため、記憶課題の成績が高くなったと考えられます。

本研究結果は、4歳から12歳までのお子さんのデータの平均値となっていますので、今後は年齢によってどのように他者の視線の影響が変わるのかなど、発達的な変化についても解析を行っていきたいと思います。

本研究は、他者の視線方向が図形を覚えているかという子どもの単純な記憶に影響するかを調べる基礎研究でしたが、将来的には子どもの教育場面への応用へとつながるかもしれません。他者の視線は、言葉を話す前の乳児期から学習に使われる重要な情報です。今後も「視線」という切り口から、ヒトの社会性や社会的学習についての理解を深めていきたいと思っています。

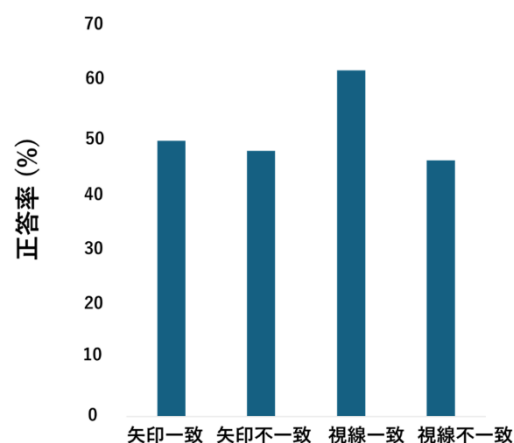


図 2. 条件ごとの正答率の平均値。